

# ユニテ

UNITÉ

## 7



### 目 次

ロマン・ロランの言葉 .....	1	
力に対する精神の闘い—ロマン・ロランの《政治》原理 .....	山口 三 夫 .....	2
ロラン＝マルヴィーダ往復書簡(4)の1 .....	南大路振一 訳 .....	22
『ロマン・ロランの母への手紙』に添えて—想い出の師友 .....	住 谷 悦 治 .....	28
Les Amis de Romain Rolland .....	宮 本 エイ子 .....	34
ユニテの広場 .....	杉本千代子・高畠敏郎・成田雅美 .....	36
友の会だより .....		42
あとがき .....		44

日本・ロマン・ロランの友の会編

## ロマン・ロランの言葉

### 「偶像」

すべての偶像崇拝に共通な点は、人間の悪い本能に理想をあてはめることである。人間は自分の利益になる悪徳を培養する。しかし彼はその悪徳を正当化する必要がある。彼は悪徳を犠牲にしようとはしない。そこでそれを理想化しなければならない。それゆえに、幾世紀の久しきにわたって人間が絶えず努力してきた問題は、自分の理想と自分の凡庸さとを一致させることであった。彼は常にそれに成功した。大衆にはそれはなんの苦もないことで、彼らは美德と悪徳を、英雄的行為と邪悪とを交互に並べる。その情熱の力と、彼らを選び去る歳月の激しい波は、自分に理論が欠けていることを、彼に忘れさせるのである。

ところが選ばれた知識人たちはそうやすやすと済ませることはできない。それは人のいうように、彼らがあまり熱情的でないからというのではない。(それは大きな誤りである。生命が豊かであればあるだけ、多くの糧をあたえ、情熱は激しく沸<sup>たぎ</sup>りたつ。大宗教家や大革命家の情熱が往々にしてその極点に達したことは、歴史がかなりよく示しているところである。)しかしこれらの精神の職人たちは緻密な仕事を愛し、推論の網の目を、絶えず、抜かすような通俗的な思惟の形態を嫌うのである。彼らにとっては、もっと目のつまつた、本能と思想が、どんなに無理しても、よくからみ合って、地に穴のない編物をあみなおすことが必要である。かくして彼らは奇怪極まる傑作をつくり出す。一人の知識人に、どんな理想でも、どんな悪い情熱でもあたえてみるがいい、彼は必ずそれをいっしょに接ぎ合す方法を見出すであろう。神への愛、人間への愛が、焼くため、殺すため、掠奪するために求められたのだ。93年の同胞愛はフランクフルト セント・ギヨタン 聖断頭台の姉妹だった。私たちは、今日、僧侶たちが、銀行業の正当なことや、戦争の正しいことを、福音書の中に探して、発見するのを見た。(1914年12月4日、ジュルナル・ド・ジュネーヴ紙)

宮本正清訳『戦いを超えて』

## 力に対する精神の闘い

—ロマン・ロランの《政治》原理—

山口三夫

《今日の問題は世界的である。いかなる民族も、他の民族と離れては救われえない。いっしょに救われるか、いっしょに消滅するかである。》

タゴール 1921年

本稿の目的は、作家＝音楽学者ロマン・ロランの人間の側面の一つに光をあてることである。彼は自己の時代の「運命」を誠実に生きたが、その時代とは二十世紀、つまり、民衆と戦争と革命の世紀の前半であった。

もしこの時代がナポレオンの言葉《今日、悲劇は政治である》により正当性を付与できるとするなら、この悲劇を生きているのはわれわれ自身であり、なんびとも政治と無関係ではありえないはずである。

ぼくはここで、とりわけ両大戦間のロマン・ロランの態度と活動に限ることになるが、それというのもこの時期、意義ふかい悲劇的な事件が相次いだこの時期にこそ、彼の《政治》原理が力強く開示されていると思うからである。とはいえ、第一次世界大戦にべつを投げずに始めることはできない。

\* \* \*

ヨーロッパ文明退廃期の政治世界に、目覚めた明晰な知識人としてあらわれたロマン・ロランが、「擾乱の時代」の専門家であったとすることができるとしても、彼はけっして「政治」の専門家ではなかった。歴史科学生としては過去の「擾乱の時代」——宗教戦争を研究テーマとして選び、劇作家として文学的経歴を始めたときは、とりわけフランス革命の専門家であり、さいごに、第一次世界大戦に際しては、生きている混沌こんとんのなかで《擾乱をこえ》、国境をこえて、人類のため人間性のため闘おうと試みた。この「憎しみ」のルツボろつぽのなかで「愛」の呼びかけを発しな

がら、この「祖国」のための戦争のなかで「ヨーロッパ原理」を堅持したとき、彼は決定的に政治の世界に引きずり込まれたのであった。なぜなら、行動によってしか政治に参加しえないからであり、ひとたび参加するや、あらゆる発言も（不発言すらが）政治的にならずにはいないからであり、したがって、この《遺憾ながら》の最初の数歩が、その後の彼の生涯の歩みを最後まで決定したと言わねばならない。彼自身が《自分の道をたどりつづけることを諦めない人間》だからでもあった。

もつとも、ドレーフェス事件のまっただなかに書かれた『狼』（1898）によって口火を切られた「フランス革命劇」連作には触れないとしても、いわゆるボーア戦争、正しくは南アフリカ戦争（1899～1902）に触発されて、ロマン・ロランは『時は来たらん』（1903）を書き、これをヨーロッパ《文明に》捧げて、この文明を告発し、これに疑惑を表明したのであった。なおまた、周知のように、彼は「戦友」シャルル・ベギー（1873－1914）が1900年に創刊した「カイエ・ド・ラ・キャンゼーヌ」による社会行動の仲間でもあり、彼自身が『ジャン・クリストフ』（1904～1912）のような文学作品においてさえ（とりわけ第7巻『家のなかで』）、来たるべき戦争に警告を発しつづけていたのであった。

それにもかかわらず第一次大戦こそが、《政治という恐るべき蜂の巣》の世界に、決定的に彼を引きずり込んだのである。政治家も知識人、芸術家、労働者も、社会主義者、キリスト者、自由思想家も、すべてが一挙に自己の理想と信念を棄てて「祖国」という偶像にしがみつき、《万場一致の戦争賛成》を叫んだ。あの第一次世界大戦である。

しかし、これは彼が政治の「専門家」になったことを意味するのではない。そしてまず、あれほど誤解され中傷された『戦い〔擾乱〕をこえて』が彼の「祖国」への尊敬にみちていること、彼自身けっして「傍観者」ではなかったことを認識しなければなるまい。そしてとりわけ彼の内面にこそ《擾乱》は吹き荒れていたのである。たしかにこの表題は、いわば慎重さを欠いていたとしても、それはまさしくのちに彼自身が《光栄ある挑戦》と呼んだものなのであり、その背後にわれわれは、彼の《見張人》としての使命感を読みとらねばならないだろう。

《……この表題はわたしを裏切った。それは、船の上方で、風にたたきつけら

れながら、綱をよじ登っていた人間を見させた。そしてそれは真実であった。しかし、宙吊りの人間の両眼が探していたもの——船の進路も、——彼の見張りという持場も人は見なかった。見張人は乗組員の一部である。しかし彼の義務は上方にある。彼は船を離れはしないのだ。もし船が沈めば、いっしょに自分も沈むだろうことを彼は知っている。しかし彼の義務は、下の舷側の雑踏に混じることではない。彼は見張りをする。やって来るもの、漂流物、かくれた暗礁、潜水艦の触角をうかがっているのだ。》(1925)

ここにこそ《戦いをこえて》という表題と、第一次世界大戦中のロランの態度の真の意義があるといわなければならない。

## Ⅰ 《戦場を見下すことを可能にする精神の独立》

### (a) 自由精神の不服従

すでに『ジャン・クリストフ』において表明されていた理念(ヨーロッパ原理)の力強い実践であった、この戦争中の経験から、『クレランボー——戦争中の自由な良心の物語』(1920)が生まれた。これは最初「万人に抗する一人」と題され、この表題で小説の一部が1917年12月に発表されたものである。作者の個人的体験の文学的移調ともみえるこの作品は、はるかにそれをこえており、作者自身が「序文」でも述べてもいるように、読者に戦争という契機をこえた省察を迫る、いわば思想小説ないし哲学小説としてとらえられるべき作品である。ここでは、終結部から数行ひくにとどめねばならない——

《「福音書」の人間は革命家、すべてのなかでもっともラジカル(根源的+急進的)な革命家だ。彼は近づきたい泉であり、そこから堅い土の割れ目の間を「革命」がほとぼしり出る。カエサルがいかなる者であれカエサルに対する、不正な「力」に対する「精神」の不服従の永遠の原理である。》

「力」に対する「精神」の「不服従」——問題の焦点はここにある。

不正や圧迫をもたらすことのない「力」がありうるだろうか？ カエサルがだれであれ、どんな姿かたちをしていようと、カエサルは「権力」のあらゆる上からの「暴力」の代名詞である。それゆえにこそロマン・ロランは、戦後いち早く

『精神の独立宣言』によって、世界の自由精神たちを結集することを望んだのである。この『宣言』は、彼の戦争中の態度と活動を総括するものであるとともに、その後の彼の歩みを予見させる。そしてこのとき、すでに、ヴェルサイユ体制の偽善が見抜かれていることは、『闘争の十五年』と『革命によって平和を』に集められた、関連する諸論説を読めば明らかになるだろう。

さらに、この戦争から得られた彼の結論の一つが、南アフリカで経験し実践してきたインドのガンジー（1869～1948）の根源線につながることを、書きとめておかなければならない。それゆえにこそ、1920年にガンジーのことを知るや、深く感銘をうけ、彼の人格と行動を研究して、いまだ名著の名に恥じない『マハトマ・ガンジー』（1923）を発表するのである。精神の共感あるいは共鳴というべきか、それとも、ガンジーがロランに宛てた最初の言葉——《人間性の本質的一致》<sup>ユニティ</sup>を想うべきであろうか？

1922年から1927年にかけてはロランにとって、《不決断と熱烈な検討の時期》であり、彼は《ヨーロッパの上に嵐が》おそうのを感じながら、《わたしのためよりも〔……〕わたしの愛する人びとのため、わが西欧のために、どんな避難所、どんな砦をこれに対抗させる》べきかを探ね、検討していた。その一方で、ヨーロッパにも《弱々しいが不壊のマハトマが建てた魂の城砦》<sup>フォート</sup>を建設できる可能性がないかを探り、マハトマの《「真理」のためにする、個人的かつ集団的な、自己犠牲という英雄的な武器》をほめ讃えながら、同時に、《闘いのなかにある、ロシア革命の大義とそのヘラクレス的な新世界の建設》を注意ぶかく追い、《水と火、インドの思想とモスクワの思想を結合させる》という逆説的な企てを、大胆におしすすめていたのだった。

## (b) 手段と目的

暴力は、ロマン・ロランにとって、つねに正義に反するものであった。一例として、革命的な《クラルテ》グループの中心であったアンリ・バルビュス（1873～1935）と、ロマン・ロラン（およびバルビュスが《ロランディスト》と呼んだ人たち）との間に、1921～1922年におこなわれた論争をあげよう。

自由と権威、自由と平等、また個人の良心、党規律などいろいろなことが問題となったが、主要点の一つは「暴力」の問題、「非承認」の問題、つまりは「手段と目的」の問題、とりわけ《精神の独立》の問題であった。

さきに引いた小説『クレランボー』の主要思想の一つはこうであった——真の進歩にとって、手段は目的よりもはるかに重要である。なぜなら、バルビュスへの公開状を引くなら、《目的は（達せられることはじつにまれで、つねに不完全なものです）人間間の外的関係をしか変えません。しかし手段は人間の精神を、あるいは正義のリズムによって、あるいは暴力のリズムによって造型します。そしてもし後者によるなら、いかなる統治形体もけっして強者による弱者の圧迫を妨げられないでしょう。》

アンリ・バルビュスが、暴力の介入は《末梢的なこと、それも一時の末梢的なことにすぎません》というのに対して、彼は《国家防衛・ブルジョワ秩序大臣でも同じ書式を使いえたでしょう》と反駁する。そして付け加える——《生きている有機体は超敏感な実質からなり、それにはこのうえなく微細な印象も刻印されて、暴力はそこに消し去りえない痕跡をのこすのです。》とりわけ革命のような《脱皮期》には、民衆の精神はいつそう変りやすく《超敏感》になるものだ、とロマン・ロランは強調している。

しかしながら、いうまでもなく、彼がロシア革命の、そして「革命」一般の目的をないがしろにしているということではない。しかし、バルビュスに書いているように、彼はつねに独立的な精神の自由な批判に重要性を付与していた——《またわたしは、共産主義の大義になしうる最大の奉仕は、その弁護をすることではなく、卒直かつ真実な批判をすることであると固く信じているのです。》内部批判の必要性を熱烈に感じていたロマン・ロランは、党派や派閥の人間でもなく、けっしてセクショナリズムに導かれることのない精神を保っていた。本質的なことは《真実》であり《人類の救済》である。そして彼は《特権的な階級は、——上にも下にも、人間的な価値に直面してはありえない》（1922）と考える。1931年にもユーージェーヌ・レルジスに——《人類の未来のために闘おうと欲する者は、政治的な面の上で闘わねばなりません、——しかし、戦場を見下すことを可能にする精神の独立を

犠牲にすることなしに。》

したがって、ロマン・ロランは、一方、レーニンに対するゴークキーの態度を感動的な例としてもちながら、彼の《不決断と熱烈な検討の時期》に、帝国主義、産業資本主義、《全民衆を、揺籃から墓場まで、隷従させる恥ずべき兵役法をフランスに当時、陰険にも押しつけようとしていた潜伏性のファシズム》——この《共通の敵》に対して闘いながら、他方、あらゆる党派の宣伝、とりわけ共産党の宣伝が、彼のような独立的な、いわばノン・セクトの人びとの名を乱用することに対して、《怒りをもって反抗し》なければならなかった。自由精神のあらゆる権利を保ちながらも、「革命」に奉仕するためにほかならなかつた。したがって彼は、たとえばイタリアの反ファシズム亡命者、歴史家G・サルヴェミーニ（1873～1957）が当時試みていたように、《第三運動》を組織することなど考えたことがなかつた。なぜなら、批判の権利を留保しながらも、《共産主義のなかに新しい、深い、民衆的な力、ファシズムに対するもっとも力強い攻撃部隊の一つでありつづけている力》を感じていたからであり、したがって、サルヴェミーニの《共産主義に前もって敵意を示す宣言》を認めることはできないのだった。

### (c) 神秘精神と行動

こうして、1927年、ソヴェト革命十周年記念の年にあたり、ロマン・ロランの立場は確定した。ソ連と共通の原理に立つと宣言して、ルナチャルスキーにこう書いている ——

《わたしはとりわけ、範例として受諾するのです。われわれが全世界において、国際的「政商」に攻撃された新聞雑誌に日ごと興奮させられている、革命ロシアに反対する破廉恥な世論動員に立会っている今日のような時に、またもう一度、ヨーロッパの諸民族を隷従させようと努め、ロシア革命の巨大な松明を吹き消そうと熱狂している偽善的な反動を真向から攻撃することは、自由なフランス人としてのわたしの義務だと信じます。》

当時、人類＝人間性の大義のために闘っている軍隊の唯一の前衛であったロシア革命に対する、帝国主義とファシズムの脅威を、彼が鋭く感じていたことは明らか



である。ソ連とこの《自由なフランス人》との関係は、また先で触れられることになる。したがってここでは、この同じ年、巨匠の死後100年を機にウィーンで『ベートーヴェンへの感謝』という講演をしたロマン・ロランが、あの記念碑的大著『ベートーヴェン——偉大な創造の時期』にとりかかっていることを、書きとめておこう。

そしてこの1927年の末から1929年5月にかけて、ロマン・ロランは《生きていくインドの神秘精神と行動に関する試論》——『ラーマクリシュナの生涯』および『ヴィヴェカーナンドの生涯と普遍的福音』（2巻）を書いた。ラビンドラナート・タゴール（1861～1941）の詩やガンジーの行動の根源的・基本的な力を探ねて、深いヒンズー教の近代ルネッサンスの源泉にたどりついていたのである。ロマン・ロランの生涯と思想におけるこの著作の重要性については、残念ながらここで語る余地がない。われわれはただ、この先駆的な著作に打込むことによって、彼が政治現実の世界から身を引き象牙の塔に閉じこもったわけではない、ということに注意しておこう。《ひとたびこの苦悩の圏にはいるや、わたしはもはやここから脱け出すことは不可能だった》と、彼自身がのちに『周航』に書いている。なぜなら、《社会行動は恐るべきリヴァイアサン（怪獣）である、——とりわけ、ずいぶん前から蓄積されてきた大僭主たちの破局的な時には》そうだからである。

いうまでもなく、ここで注意しなければならないのは、彼がマハトマのうちに「自由精神」の力強い更新と「行動」の新しい形式を見出していたとしても、このガンジー的非暴力の闘争手段を唯一絶対と考えていたわけではないこと、——第一次大戦中、トルストイ的アナーキズムの反抗手段に否定的な態度をとった彼である——《来たるべき殺戮からの解放の言葉、逃げるのではなく抵抗する英雄的な「非暴力」、インドの小柄な聖フランチェスコの「不殺生」》を、伝統も風土もまったく異なるヨーロッパにおいても有効に生かせるかどうかは、実際に実験して確かめるのであれば、だれにもわからないことなのであった。

だから、恐るべき諸問題を前にして、彼は孤独であった。

## Ⅱ 《われわれすべてが共通の敵に対して結集しよう！》

### (d) 緊迫する情勢のなかで

しかしながら、客観情勢は日ごとに重大さをまし、脅威にみちて、《戦争は四方八方から来つつ》あり、《世界全体が崩壊の寸前にある》状態であった。あちこち迷っている時ではなかった。情勢自体を変えなければならなかった。《問題はもはや、この変化がなされるべきか否かではない。問題はただひとつ、いかなる手段により、いかなる戦術によって、もっとも確実かつ迅速に、この変化が行なわれるかである。》そしてロマン・ロランは、同僚たる知識人たちに《二者択一》として、《あるいは、ガンジーの意味における組織された全民衆の積極的かつ有効な抵抗か、あるいは、精神労働者と肉体労働者の組織された蜂起か》（1932年4月）を選ぶよう提案するのである。

そして彼は《精神労働者と肉体労働者の連合戦線》を呼びかける。——《われわれの国際的な「祖国」……ソ連が脅かされている。〔……〕ヨーロッパは剣と取引とのファシズムに引き渡されている。》（同5月）《戦争が来つつある。〔……〕そしてそれは名づけようのない事態、全文明の殺戮となるだろう。〔……〕われわれはあらゆる民族、あらゆる党派、善意あるあらゆる男、あらゆる女に呼びかける。〔……〕われわれすべてが共通の敵に対して結集しよう！戦争に襲いかかろう！戦争を止めよう！》（同6月）そして同時にロマン・ロランは、《現在、人類に提起されているもっともりっぱな戦術形式》である「アヒンサ」の実験をするよう促すのである。——《欺いている国家に「否」をいう民衆の、暴力なき全面的な「非承認」の無敵の力をわたしは信じる。〔……〕そしてそれはたんに《否》というばかりではなく、この《否》を行動に移す民衆の積極的かつ有効な「抵抗」なのである。》（同上）《おそらく、戦争に膝を屈しさせることのできる唯一の偉大な「非暴力」という戦術を、わたしは知っています。〔……〕ともかくわれわれは実験がどう終わるかを知りません。わたしはそれを西洋でも適用するつもりです。》（同年7月）

情勢は緊迫していた。そして1932年8月末、とくにアンリ・パルビュスの不屈

の献身によって準備された「戦争反対全党派世界大会」が、アムステルダムで開かれたとき、病気のため出席できなかった名誉議長ロマン・ロランは、《共同戦線》のためにアピールを發し、たんに「暴力」と「非暴力」の協力のみならず、共通の敵、ファシズムと戦争に反対する闘争を組むためにあらゆる力の協力を訴える。なぜなら、《暴力か非暴力かのアカデミックな議論はもはや季節はずれであった》からである。アムステルダム会議の第一日に読まれた名誉議長のメッセージには、こんな言葉が見出される ——

《われわれ各人、各党は、その武器、その戦術を持ち寄っています。それらに対決させてみましょう。すべての誠実な献身を調整するように努めましょう。全般的な行動のなかには、すべてが同じ目的に集中してさえいれば、多くの個別的な行動の余地があります。[……] 戦闘の戦線が全地上にひろがる軍隊は、その全般的な行動を命令しながらも、各戦線がそれぞれ行動の自由をもつことを認めねばなりません。行動形式は、各戦線で、敵のとる行動とともに変化します。》

ここで、「手段と目的」の問題にかんする矛盾をとりあげ、それを批判してみてもはじまらないだろう。なぜなら、《しかし実際、この〔精神の〕独立をだれが保証するのだろうか？ 「革命」は勝利をおさめないかぎり、そうすることはできない。闘争においては、勝たなければならないのだ》と、彼が叫ばずにはいられなかったとき、とりまく社会は、全世界は、まさに壊滅の前夜にあった。そして深い危機意識におしあげられて、彼はあらゆる力、あらゆる手段を結合する必要性をやみがたく感じていたのである。

#### (e) すべてを戦争反対に

小説『魅せられたる魂』においてさえ、いわば「なまに」このことが論じられているとすれば、彼のはげしい危機感と絶望的な献身が証明されるしかないだろう。この時期に書かれていた『告知する女』Ⅱ「出産」（第三部「聖なる道」）には、こう読まれるのである ——

《「革命」は、ヨーロッパにおいて、攻撃の先制を「反動」にとらせるにま

かせていた。〔……〕敵が先手をとっていた。〔……〕ヨーロッパ中で、ファシズムが道徳的・社会的秩序の擁護者を自任していた。〔……〕大ブルジョワは、当然のことながら自分自身の精力をほとんど信用せず、かなり明敏だったから「総裁」や「総統」たちに棍棒を渡したのだった。彼らは民衆の出で、民衆のエネルギーは完全なままだったから、狼が番犬になりすましているのだった。〔……〕

もはや言いまぎらす時ではなかった。賛成か、反対か！ 暴力か非暴力かのアカデミックな議論はもはや季節はずれであった。反動のあらゆる力の連合に対して、あらゆる力の、暴力の、非暴力の連合をつくりあげることが重要だった。〔……〕いっさいが闘争にとって武器であった。その闘争を、いまやアンネットの精神は受け入れていた。彼女の精神は闘争が必要だと認めていた。》

《あらゆる力の連合》——まさしく問題はここにある。しかし、このロマン・ロランの態度は、たんにこの時期だけのものでも、政治的的局面だけのものでもないことを、われわれは知っている。最後の局面に限るとしても、すでに1922年、アンリ・バルビュスおよび《クラルテ》グループとの論争に際して、彼は書いていた——《結合した諸力の自由な働きのなかにこそ、未来の革命形式を探らねばなりません。》そして、起草には加わらなかったアムステルダム会議の仮「宣言」にかんして、1932年12月、彼はバルビュスに書いた。——それは、革命闘争に熱誠をささげるのあまり、個人的な「良心的兵役拒否者」や、非組織的な拒否や、ガンジーを中心とする組織的「非承認」に、侮蔑的な意味での《平和主義的》という形容詞を適用しないようにと、いわば戒告するためであった。そしてまた、トルストイのアナーキストの《非抵抗者》と、集団的「不服従」によるガンジー的《抵抗者》とを混同しないよう警告するためであった。

彼としては、戦争とファシズムに対してあらゆる手段の協力を提案しているのであって、ただたんに、《あらゆる場合に、わたしに関するかぎり、「良心的兵役拒否者」やガンジー的「非承認者」の立場をけつして放棄しない》ばかりか、彼はさらに《闘争における彼ら固有の行動の権利》を要求するのである。そして付け加え

《もしこれらの権利が彼らに認められないならば、わたしは道徳的に「委員会」から私の名を引き下げねばならないでしょう。わたしはもちろん——いかなる場合にも——ソ連擁護とプロレタリア革命のために闘いをやめないでしょう。しかしわたしはそれを党派から自由な人間としてやるでしょう。わたしは闘争の戦術と闘争そのものを混同しません。わたしは「革命」のあらゆる党派の、暴力も非暴力も、一種の総司令部が、一つではなく共同の行動計画、卑屈に同じなのではなく、知的に結合し調整された行動計画を作成するために、形成されることを心から願っています。》

この問題は、戦争反対闘争世界委員会国際事務局の第二回総会で討議され、このロランの要求は受理されて、事務局は、《無条件に》《戦争に反対する闘争に献身するあらゆる組織と個人的意志》を受け入れる、と声明を発したのであった。

#### (Ⅱ) アムステルダム＝プレイエル運動

これがアムステルダム会議の意義である。そして、いかに《政治》ばなれした理想主義的知識人の《牧歌的》態度のようにみえようとも、ここにこそまさにロマン・ロランの《政治的》本質がある、とぼくにはおもえる。1940年に彼は書いた——《少なくともわたしは、ある一つの政治の盲目的な選手だったことはいちどもなかった。圧迫に対するわたしの闘争において、圧迫者たちを色分けしたことはいちどもなかった。》

片山潜ほか三人の日本人を含む、世界26国3万の組織と3,000万の加盟者を代表する公式代表2,200人を結集し、社会主義諸党派のリーダーや大労働組合幹部の頭ごしに、革命的な労働者・知識人が手を握りあい、戦争とファシズムに対する共同戦線を形成した、このアムステルダム会議の成功が、4年後の「人民戦線」を準備したのである。（歴史家はなぜかあまり触れないが、ぼくはこれをくりかえし口にし、強調しておく。）

パリの報告集会は2,000人以上を集め、ホールにはいりきれないほどであったが、これを警官隊が襲撃した事実を付け加えよう。このこと自体が、会議の成功を裏か

ら照らしているだろう。

こうして、アムステルダム＝プレイエル運動は（というのも、第二回世界大会はパリのプレイエル・ホールで開かれたからだ）戦争とファシズムに反対する原動力として展開していこう。にもかかわらず、一方、ヒトラーが1933年2月、ドイツ共和国の首相となるや、世界は目まぐるしく転落の一途をたどり、1936年、ついに勝利した「人民戦線」も、短命であるのほかなく、1938年9月には、「ミュンヘン協定」によってチェンバレンとダラディエがヒトラーに譲歩し、翌年3月、《中欧のスイス》チェコスロヴァキアはナチスの軍靴にふみにじられ、同年8月、リーベントロップがモスクワの土をふんで、独ソ不可侵条約の締結に成功、—— こうしたすべては歴史の記録するところである。

### Ⅲ 《わたしはそれを言い、それを書きたい欲求を抑えつける》

#### (8) ロマン・ロランとソ連

ここで、部分的にならざるをえなくとも、ロマン・ロランのソヴェト・ロシア、すなわちスターリン体制下のソ連にたいする態度を、考察しないで通り過ぎることはできない。なぜなら、彼はあれほど精力的にソ連を擁護したからであり、1935年にはソ連へ旅行し（ゴリキーに会い、彼の家に滞在することが主要目的であったとしても）、スターリン自身にも会っているからである。

しかし、残念ながら、われわれはこの問題にかんする資料を、断片的に少ししかもっていないのである。1934年までに発表された論文は二巻に収められているが、1935年以降のものは、あまりにも日本人の目には触れえない。さらに、彼の死後刊行されている「カイエ・ロマン・ロラン」双書をみても明らかのように、とりわけ政治的態度的にかんしては、彼の日記によってしか、われわれは彼の真の思想をおしはかることができないのである。第一次大戦中の『戦時の日記』は（これも全部ではないが）邦訳も存在するとしても、20年代、30年代については、ごくわずかの断片だけなのである。

ところで、ロマン・ロランはなぜスターリン体制下のソ連を擁護したのか？ この時期の日記の全面的公開まで謎はこのころとしても、少なくともわれわれは、当時

の世界情勢があまりにも緊迫しており、ファシズムと《四方八方から来つつある》戦争とに反対する《前進している軍隊の前衛》たるプロレタリア革命、ソ連を彼が擁護せずにはいられなかった、とは言いうるのであろう。

\*

\*

\*

周知のように、1932年に共産主義に（彼の考える意味での「共産主義」に）《回心》していたアンドレ・ジッドは、『ソ連から帰って』（1936）および『ソ連から帰って修正』（1937）によって、いわばスキャンダルをひきおこしたのであった。『修正』は次のように書きはじめられている――

《わたしの『ソ連から帰って』の出版のためわたしは数多くの侮辱を受けた。ロマン・ロランのそれはわたしを苦しめた。わたしは彼の書くものはあまり好きになったことはないが、少なくとも彼の道徳的人格は高く評価している。わたしの傷心はそこから来ている――偉大さの絶頂に登りつめるまえに生涯の終りに達する人間のいかにまれなことか。わたしは『戦いをこえて』の著者は老いたロランを厳しく批判しているだろうと信じている。この驚は巢をつくり、そこに休らうがいいのだ。》

たしかに、最初のスターリン体制批判と言えなくもないこの本に対するロマン・ロランの批判は、厳しく、むきだして、ジッドの言う彼の《道徳的人格》にはふさわしくないほどだった、とさえ言えるだろう。なぜなら、これは《凡庸な、驚くべく貧弱な、表皮的な、子供っぽい、矛盾だらけの本》だと言い、具体的な例証もなく、《わたしはもうこの本のことは語りたくない》と叫んで、投げ出してしまったからである。これには二人の作家の関係前史があり、アメリカの研究者フレデリック・ジョン・ハリスが『アンドレ・ジッドとロマン・ロラン』（1973）に述べているように、ソヴェト旅行まえジッドがロランに食べ物心配をしたといったようなことを含めて、個人的なことに属する判断が多くかくされているのだが、それはともあれ、すでに1934年、ロマン・ロランが《この闘争が1914年の「戦いをこえて」と矛盾しているとはけっしておっしゃらないように！》と、自ら警告を発していたことを指摘しておこう。

第一次世界大戦は諸国民間の戦争であったが、《すでにずいぶんまえに国民の段

階はこえられた！」のであり、《真の闘争、豊穡かつ必要な唯一の闘争がたたかわれねばならないのは、国際的な面においてである》からであった。そしてこの闘争は彼にとって、つぎの四つの局面をもっていた——

《1. ソ連の擁護。

2. 国際平和の擁護。

そしてこれらに必要な相補物として、

3. ヨーロッパであれ植民地諸国のものであれ、資本主義的・軍国主義的帝国主義に対する闘争。

4. ここ数年強化されている、ファシズムに反対する闘争。》

もちろん、彼はスターリンの肅清を知らないのではなかった。しかし彼は、たとえば1927年に、『ロシアにおける弾圧』にかんして、「リベルテール」誌への手紙に書いていた——《ロシア革命の誤り、愚かさ、そしてしばしば罪さえもがいかなるものであるとしても、ロシア革命は近代ヨーロッパ最大の、もっとも力強い、もっとも豊かな社会的努力をあらわしているのです。》さらに、1932年に、ガストン・リウーへの返事として——《わたしは見ないでいるではありませんし、じつにしばしばソ連に面と向ってわたしにはソ連の誤りとおもえるものを言っております。しかしソ連はもっとも英雄的な経験、未来へのもっとも堅固な社会的希望を具現していると信じますし、そうであることを知っております。》

そして彼もまた、アンドレ・ジッドのように、ソヴェトに旅行し、スターリンと会見さえしたのである——(ジッドにはその機会がなかった!)。彼もまた西欧の《自由な人間》としてそこで見たり感じたりしたことはすべて、しかし、けっして公表されなかった。彼の観察はただもっぱら日記にのみ書き込まれ、われわれはまだその断片をごくわずかに読むことができるにすぎない。

#### (h) 断片を通して

ロランのソヴェト旅行について、ここでは、いくつかの事実を指摘することに甘んじなければならない。

まず、彼がゴーリキーは自由ではないと嗅ぎつけていた事実である。ロランの日



記を引用しているジャン・ペリュス氏によれば（『ロマン・ロランとマクシム・ゴーリキー』1968）——《彼はゴーリキー自身が警察組織の囚われ人だと思う。ゴーリキーは自由ではない。彼は秘書のフルチコフにびったり管理されている。フルチコフは《外部とのすべての交渉の唯一の支配者になってしまった。手紙や訪問（むしろ、訪問の申し出、と言うべきだろう）、彼はすべてを遮断しており、ただ彼ひとりが何がゴーリキーまで達すべきか、あるいは達すべきでないかを判断しているのだ。》

つぎに、彼のスターリン会見記が公表されなかったことについて。約束されていたにもかかわらず、また彼がなんども要求したにもかかわらず、クレムリンの許可が、彼の帰国後にも届かなかったのである。その理由は、ジャン・ペリュス氏を信じるなら、そしてわれわれにこれを疑う理由はないのだが、《会見の目的は主として、西欧の知識人たちに対するソヴェト政府の不手際とロマン・ロランの目には映るいくつかのことで、スターリンに警告することであった》からにはほかならないと思われる。

さいごに、反スターリンのヴィクトル・セルジュの釈放が、この会見ののち実現したことを報告しておく。

ところで、いうまでもなくロランにとって、スターリン個人の擁護は問題とはなりえなかった。問題は、革命体制と人間性の大義の擁護である。ロラン自身、1937年4月～1938年1月の日記に書いている（J.ペリュス、前掲書による）——

《スターリンとトロツキーとの間で、わたしの個人的な好みは前者のほうにあるとしても（すでに、トロツキーがソ連の最悪の敵たちとの犯罪的な結託によって信用を失わずと以前からそうだった）——わたしが擁護するのはスターリンではない。それはソ連だ——そしてソ連を代表する指導者がだれになろうとも。個人崇拜ほどわたしに有害と思えるものはない。スターリン、ヒトラー、ムッソリーニ。わたしが同意をあたえるのは、自己の運命を支配する自由な諸国民衆の大義にだけである。》

ここで、ついでに書き添えるなら、トロツキーよりスターリンを好んだロランではあるが、トロツキーの亡命に関連して、こんな公開状を書いているのである——

《レフ・トロツキーが求めてきた隠れ家を拒んだことは、フランス民主主義の永遠の恥辱となることでしょう。》（「レ・アンブル」誌、1934年5月～6月号）

いかにもあれ、ロマン・ロランは最後まで、少なくとも公式的には、大粛清のさなかにさえ、スターリン体制下のソ連を擁護したのである。なぜか？ ここでもまた、日記の全面的公開を待たねばならないが、われわれはすでに知られているいくつかの断片を読むことはできる。

ソ連にたいしてロランの介入を求めたヘルマン・ヘッセに、1938年、《ゴーリキーが生きていた間は、彼の仲介で、わたしは多くのことができました。——今や、何もできません》と書いたロランは、その数カ月前、ひそかに日記に書きとめていたのである ——

《これはもつとも絶対的な、管理されない専制の体制だ。もつとも基本的な諸自由、正義や人間性というもつとも神聖な権利に、影ほども保障がのこされてはいない。わたしは自分のなかに苦痛と反抗がうなりを立てるのを聞く。わたしはそれを言い、それを書きたい欲求を抑えつける。そしてわたしもまた、麻痺させられる。〔……〕わたしがこの体制にごくわずかでも非難を発すれば、フランスや全世界にいる怒り狂ったこの体制の敵どもが、毒をぬった武器のように、わたしの言葉を、このうえなく犯罪的な悪意をこめてつかみとるに決まっているのだ。》

《誠実な》ジッドが、スターリン体制への批判を公表し、彼なりの「共産主義」へ別れを告げて、《自由な人間》として個人的な心理的解放を実現したようには、ロマン・ロランは振舞わなかった。彼にとってまず第一に重要であったのは、ファシズムと帝国主義に挑発された戦争の脅威、緊迫した脅威に直面し正対することであり、彼の思想と、世界の政治現実の当時の情勢にたいする彼の理解からして、これしかなかった革命ロシアという《前進する軍隊の前衛》の擁護なのであった。

#### (i) 《平和の老闘士》戦争に賛成

これとともに、1922年から住んでいたスイスのヴィルヌーヴを去ってフランスへ帰ることを決意し、1938年にこれが実現したことを見ておこう。——《わたし

は、苦痛なしとしませんが、スイスを去る決意を定めました。ここではもう自由な空気が吸えないからです。褐色や黒色のペストの感染が、スイスをもとらえました。わたしの場は「人民戦線」のフランスにあります——そのフランスが脅威をうけているだけにますます。》(片山敏彦宛)

したがって、当時「革命劇」の頂点をなす『ロベスピエール』を執筆していた72歳のロマン・ロランが、論文『革命の必要性』において、コンドルセ(1743~94)の姿を喚起したことは、啓示的である。獄中で、処刑を前にして、『人間精神の進歩の歴史的概観』を書き上げた、あのコンドルセである。《あらゆる鎖から解放され、偶然の帝国からも進歩の敵たちの帝国からも逃がれ、確乎たる確かな歩みで真理、美德、幸福への道を歩いている人類のこの概観》と、ロランはこの著作のことを書いている。

「革命の運命」は、人類のたんに一時期のものではないからであろう。

こうして、彼はミュンヘン協定、この《平和》を《下劣な妥協》にとらえ、《外交上のスダン〔普仏戦争でフランスが敗北した地〕》として抗議した。ちなみに、アンドレ・ジッドは、マルタン・デュ・ガールへの手紙にも見られるように、戦争を避けることができたとして、大喜びでこの協定に《勝利》を見たのであった。

そしてヒトラーによるチェコスロヴァキア侵略に際しては、『世界の上に喪』というはげしい叫びを發し、ロランはこう言うのである——《われわれは「総統」の善意を信じるほど素朴ではなかった。われわれは暴力と虚偽による彼の、力の補給係下士官の、世界を支配せんとする根をはった意志を認識していた。憤慨するのは時間のむだであろう。われわれが予見していたことが起こったのである。そうではなく、これから何が起こるかを語らねばならない。》

そして、さらに、独ソ不可侵条約によってひきおこされたヨーロッパ、とりわけフランス左翼陣営の退廃的混乱と動揺のさなかに、彼は揺るがず洞察力をもって立ちつづけるのである。

にもかかわらず、いや、それゆえにこそと言うべきか、ついに戦争が勃発するや、この《平和の老闘士》は、首相エドゥアール・ダラディエに書くのである——《フランス共和国が、ヨーロッパ中にあふれているヒトラーの暴虐の道をふさぐため立

ち上がっている、この決定的な日々には、——第三帝国の野蛮と、不実と、度はずれな野望をつねに告発した平和の老闘士に、——今日危機に瀕している、フランスと世界の民主主義の大義にたいする、その全面的な献身を表明することをお許しください。》

### 結びとして

《戦いをこえて》からこの《民主主義の大義への全面的な献身》への道は遠い！しかし、彼の《不決断と熱烈な検討の時期》、1926年に、《「非承認」の問題——国家に反対する個人の良心の問題を、情状を酌量することなく、明らかにし徹底的に押しすすめること》と書きとめていた、あの60歳の人間のことを考えようではないか。その後も、歴史の展開とともに彼自身の闘いを積み重ねながら、ナチス占領下の祖国で——《わが国のなかの異国にて》（アラゴン）——《「行動」の圏外に出た》彼は、誠実に人類の命運をたどりながら、自分の生涯をふりかえって、《わたしの天性はあらゆる人種主義を嫌悪していた》と書いている。そしてまた——  
《けっしてわたしは資本主義的・軍国主義的帝国主義に対する闘いを国際平和の擁護から分離したことはなかった。なぜならわたしは国際平和が、帝国主義的大事業の首領たちと、彼らにへつらうと同時に彼らに支えられていたファシズムとの提携によって、脅かされるのを見ていたからである。》

（『内面の旅路』「周航」）

本質的な問題は彼にとって、《「自由」を否認するようなフランスは、ぼくの祖国ではありえない》と書いていた学生時代から、国家権力に反対する人間精神の問題であった、と言える。なぜなら、第三共和制を生きてきたフランス人として、《人間の尊厳》が《近代国家によって、民主主義国家によってさえ、とりわけ民主主義国家によって、絶えず平手打ちをくわされ、棄損されてきた》ことを、彼は身をもって感じていたからである。そしてさらに、《国家にはけっして精神の自由に手を触れさせてはならない》からなのである。

つねに《すべての被圧迫者と共に、圧迫者に反対し》ようとし、「思想」の血であり目的である「行動」において《飢えている者、搾取されている者、圧迫されて

いる者への奉仕者》であろうと決意していたロマン・ロランは、「精神」の独立と自由の大義のために闘いつづけた。

彼は決して国家の、諸国家の権力に欺かれたことはなかった。すでに第一次世界大戦中、《闘い（数にはいる唯一の闘い）は国家間のものではなく（国家はみな、ニュアンスは違え同じことです）、すべての国家内における、少数の精神とその残部との闘いです》と、書いていたではなかったか？ 《擁護》——たとえば、自由の擁護とか民主主義の擁護ということについて、それが諸国の政府から発せられるとき、彼はその本質をはっきりと見抜き、こう書いていた——《この《擁護》という語が今日あらゆる政府の口から出ると何を意味しようとしているかは周知です。あらゆる征服、あらゆる攻撃を権威づけるものなのです。》（1925）

こうしてわれわれは、ロマン・ロランの《政治》原理なるものが、《インドの聖パウロ》ヴィヴェカーナンダ（1863～1902）の宗教原理と同じ基盤をもつことを知るのである。インドの宗教家は宣言した——《死にかけている者たちの命を救うためにあなた自身の命をあてることから始めるがいい——これが宗教の本質である。》あるいは、《わたしの国に餌のない犬が一匹でもいるかぎり、この犬に餌をあてるのがわたしの全宗教となるだろう。》そしてロマン・ロラン自身、1930年にヴィヴェカーナンダの言葉を引きながら——

《それ〔彼の宗教〕はまたわたしのものでもあります。わたしは飢えている者、搾取されている者、圧迫されている者への奉仕者です。彼らに、もしわたしに可能だとして、精神の宝をあてるまえに、わたしは彼らにパンと正義と自由を負っています。わたしが知性の特権にあずかっていること自体がわたしに手段を提供し、したがってわたしに、有効に共同体を助ける義務を命じるのです。〔……〕——いいえ、わたしは政治に背を向けません。そうではなく、魂と行動の師ガンジーの範例にしたがって、この二つの調和を実現するよう努力するでしょう。》（傍点引用者）

《魂と行動の調和》——これが《政治的》にどんな結果をもたらしうるにせよ、生きている現実にもて参加することこそ彼の《政治》だったのであり、これはまた音楽的ではないだろうか？ 彼は音楽という《ユニテの泉》に、絶えず

根源的な力を汲みつけたのであった。とはいえ、彼の良心の密度を考えながら、ロマン・ロランの内面の「分裂」にこそ思いをいたさねばならない。いかばかりの血が流されたことか……。そして、この分裂の血から浮かび出る一つの微笑、魂を鎮めるマハトマの聖なる微笑のイメージを心に喚起しながら、1940年のロマン・ロランの言葉を読み返そう——

《[……] われわれがつづけてきた行動が敗北に導いたとしても、わたしはこの行動を遺憾とはしない。[……] わたしは人間性の理想に忠実でありつづけた。たとえわたしが倒れても、理想はまた起き上がるだろう。[……] 歴史が審判するだろう。[……] 1940年の先例のない災禍、全西欧をおおったこの猛烈な高潮とともに、わたしの生涯の大きな「幻影」の最後の局面は閉じられる。わたしは行動の圏外へ出た。行動が諸世界の運行の初めにあるというのはありうることだ。

《初めに行動ありき》と、ファウストは言う。

しかし終りに行動はない。われわれの連続をくりかえし言おう——《御意ノマナニ為シタマエ》！……》（『内面の旅路』「周航」）

この「民主主義国」日本において、われわれ各人のなかに《わたしは受諾しない》という決意が、さらに少しでも芽吹きますように！

#### 〔お詫び〕

1. 本稿は、1977年7月にフランス語で書き上げ、最近発表した論文にそってまとめたものであるため、すでに日本語で発表した文章とかさなる部分が多くあることをお詫びする。
2. しかし、筆者としては初めて言及したり引用したところもあり、初めて邦訳されたロラン断章も含まれる。
3. 註はすべて省いた。とりわけ出典、その頁数を示すには、日本語版全集収録のものについてはそれに準拠すべきであると考えながら、その照合のいとまがなかったからである。重要な註のいくつかは、文脈の許すかぎり本文に加えるよう努力した。なお、とくに指示のない引用は、すべてロランの言葉である。

4. もととした論文の性質上、たんなる概観に終わったことを遺憾とする。だが、読者がこれからロランを読み、ロランについて考え、そして自分自身の道を歩みつつけられるうえて、少しでも刺激になれば幸いである。

( 1978年4月 )

## マルヴィーダとロランの往復書簡(4)の1

### Ⅰ マルヴィーダからロランへ

ローマにて

1891年2月4日、水曜日

　　したい友！あなたがまだ当地におられるのに、私はもう筆をとります。さもないとこの手紙がカプリへ頃合いに着かぬことが心配だからです。ちょうど今、いくつかの断片<sup>1)</sup>を読んだところですが、私はこれまで以上にあなたの同盟者です。そうです、私たちは勝たねばなりません。あなたの使命はあまりにも明らかで、それがもう一度かき消されることはありません。あなたの不在中、私にできるだけのことをしておきましょう。天気がよくて仕合わせです。これが続きますように。そして旅行があなたの<sup>からだ</sup>身体を強くし、あなたの心に勝利の喜びをもたらしますように。あなたに同伴している気持のこの私のためにも楽しんで下さい。運命は恵みぶかくて、天に祝福されたこの地方〔南イタリアとシチリア〕を二人でもう一度楽しむことを許してくれるかも知れません。そうでない場合には、私はあなたが戻られてから、あなたの目でこの地方を見ることにしましょう。（———）では、ご機嫌よう！くれぐれも仕合わせでいて下さい。すべての厭わしい思いを捨て去っ

て、どうか健康と青春と希望と美をたっぷり飲んで下さるように。

あなたを愛する友

M

注

- 1) ロランがマルヴィーダの手許に残しておいた美術史関係の論文、短い小説『ローマの五月』（残存せず）など。

## Ⅱ ロランからマルヴィーダへ

カプリにて

1891年2月5日、木曜日の夕方

したい友、このカプリであなたのご親切な便りを見出したところです。お気持がここへ先回りしたものですから、私にはあなたが当地におられるにちがいないと思えるのです。ええ、あなたは当地におられます。ただどこということが分からないだけです。この〔カプリの〕町ではお見かけしませんでした。ひょっとするとアナカプリ<sup>1)</sup>に。明日そこであなたを探してみましょう。

ただ今のところ私は一人きりです。同行者たちはもう就寝しました。風の唸りと海のどよめきが聞こえます。この夜、それ以外に物音はしません。いささかメランコリックな心境です。過去のことを考えるわけではないのですが、知らず知らずそれを感じます。しかしこうして孤独の夜に——ただ孤独の夜だけに触れていますと、私はこれまで以上に強くあり、一種、晴朗な平安に満たされます。

カステルアマレからマッサールブレンゼまでの馬車の旅は楽しいでした。そこで私たちはカプリ行きの帆かけ船に乗ったのですが、そこで私がひどく酔ったことは、いまさら申すまでもありません。しかし私は我慢しなければなりません。そして意地を張って、この波の揺さぶりをいつも愛そうとさえするのです——たとえそれに



苦しもうとも。

### 土曜日の朝

カブリで囚われの身になっています。ひどい時化で、やって来る船がないのです。この島に上陸したのは、私たちの帆かけ船が最後でした。——それでも私たちは今日中に「本土」へ帰るため最善をつくしてみます。そして着けばすぐにこの手紙を投函します。私の旅行についてもっと規則的にお知らせしたいのですが、ご覧のように、はやくもさまざまな外的障害が立ちほだかります。

昨日は——風にもかかわらず天気がとてもよかったので——私たちは島中を歩き回りました。見張らし地点、美人、自然の驚異、そして本物のカブリ産ブドウ酒を求めて岩という岩によじ登り、道という道をさぐりました。（駄目だったのはブドウ酒だけです。）私にとってカブリ随一の名所と思えたのは、それはモンテ・ソラロ<sup>2)</sup>の展望台からの眺めにもまして、アルコ・ナトゥラーレ<sup>3)</sup>——海上を駆けるかに見えるこの巨岩のアーチです。私は大広場のあらゆるアーチをこの一つのアーチと引き替えにするでしょう。ご覧のとおり、私はいつも少々野蛮です。私にとって偶然の生んだ作品は、芸術的知性のつくる作品よりも好ましいのです。

ああ、何という風の唸り、海の嘆き。あなたの気分がすぐれ、この数日外出して太陽を十分に味わわれ、ヴィラ・マッティ<sup>4)</sup>を訪れられたことを願っています。

さようなら、いとしい友、心からあなたを愛します。

R. ロラン

ともかく火曜日には [本土の] ターラントへ行っています。

### 注

- 1) カブリ島の中心地カブリ市から西方3キロの高地にある景勝の地。
- 2) 海拔589メートル。すばらしい眺望で知られている。
- 3) 「自然のアーチ」の意。
- 4) 『ユニテ』2, p.10の注1)参照。

### Ⅲ マルヴィーダからロランへ

ローマにて

1891年2月10日、火曜日

私のしたい友、昨日いただいたカプリからのお便りに厚くお礼を申します。あなた方は皆よって無分別なことをやりました。そんな時化<sup>し</sup>にカプリ島を立ち去るとは！ともかくカプリを船出できたのなら、あなたは今日はターラントにおられるに違いありません。その近くにはピタゴラスのいた場所があります。どうか彼の霊があなたに真にギリシア的なインスピレーションを与えてくれますように。といいますのは、たしかに彼はもっとも純粋なギリシア人のひとりでした。

そして明日あなたはエトナの火山を見るでしょう。すると始源の諸力がはたらく深みからエンペドクレス——その諸力と一つになるために我とわが身を投じたあのエンペドクレスがあなたを迎えるでしょう。こんな旅行のためなら、したい友、エコル・ノルマルに学ぶだけのことはあったと白状なさい！——あなたのために受け取ったばかりのモノー<sup>1)</sup>の手紙をお送りします。私が彼とは見解を異にしていることはあなたもご存知です。つまり、犠牲について彼がいうこと（もちろん私はこの手紙を読みました）は尤もで正しいのですが、ただあなたには当てはまらないのです。あなたはもう犠牲を払ったのです。もう一度それをするなら、あなたは破滅するにきまっています。ところで、教職を最終的に放棄できるかどうかという問題の解決が容易になるというのなら、あなたが学位論文を書くことを止めるものはありません。そしてたった今、私にどんな考えが浮かんだかご存知ですか？——シチリアで、フリードリヒ二世<sup>2)</sup>がそれとも彼の感じのよい庶子マンフレートについて何かテーマをお選びなさい！シチリアへ戻るための根拠がこれですぐできます。しかしこれについては誰とも話さないでおきましょう。私のほうでその間にしておくことがあります！

ところでモノーの私への手紙から、彼が『オルシーノ』に感動していることが分かります。——その感動はあの時あなたに見せたものをはるかに上回ります。彼は

あなたがすぐさま反抗的態度に出はしまいかと不安だったのです。(人間というものは、自分たちの抵抗が反抗をよび起こすことを殆ど悟らないのです。)彼は言っています、「私が彼のドラマを正しく評価しなかったとはお考えにならないで下さい。私はこのドラマを大したものと思いました。彼は人物を創造し、それらを行動させることをし遂げました。劇芸術のすべてはこれに尽きます。それで生きた人間を創造するというこの要点は、もっとも稀有の才能に属します。リリュッサさえまずい出来ではありません。第一場は少し長すぎるように思えますが、リオナルドの科白はすばらしいです。そして私はとくにリオナルドに愛着をおぼえます。あらゆる修辞技巧のないことが、とくに注目に値する——とあなたがおっしゃるのは正しいです。ここにあるのは純粋な文体です。」

したい友、ご覧のようにモノーはあのドラマにすっかり感動しています。ただそれを——前述のように——不安のためあなたに示そうとはしなかったのです。ただ一つ彼が危惧しているのは、歴史の素養のあまりない一般観客には、このドラマの価値が分からないことです。これは一回上演してみれば決まります。だからやってみなければなりません。もし成功しなければ、その経験から、私たちにとってどこに問題があるのかが分かります。私はモノーに、もし彼が望むのなら、ムネ<sup>3)</sup>のほかにシュレ<sup>4)</sup>にも見せて差支えないと書いておきました。あなたのほうに異存はないでしょうね？ シュレはほんとうに詩的な魂をもっています。それはワーグナーにたいしてみせた理解からお分かりです。

( — — — )

したい友！あなたが恵みぶかい自然のおかげで晴朗な平安をますます回復されるよう願っています。過去のことはエトナの噴火口に投げ込みなさい——エンベドクレスが、不死の者として新たな生命に甦るため、現世のはかない姿をみずから投げ入れたように。あの出来事は、キュプリス〔美神アフロディテ〕が彼女の絶対的な力の映像を一個のうるわしい姿に託してあなたに示したのです——彼女の外見をば実感のこもった真の仕方で再現する能力をあなたに与えようとして。( — — ) あなたの念頭にある理想にふさわしいより高い啓示が、将来その時が来れば、かならずやあなたに起こることでしょう。ですからあらゆる方面に向かって

勇気をお出しなさい。シュロの枝はただ高貴な戦士にのみ与えられるのであり、戦場で勝利のうちに倒れることは、物質的幸福による市民的な平安に甘んじることにまさります。

トルストイの手紙<sup>5)</sup>の内容についてモノーと話しましたか？私は彼にトルストイからあなたに便りがあった、とだけ書いておきました。

ローマで内閣が成立しました。とても不快な組合せで、おそらく長続きはしないでしょう。ただ一人よいのは文部大臣のヴィルラルリ<sup>6)</sup>です。謝肉祭の馬鹿さわざは今日で終わります。私はピンチョの丘からピアッツァ・デレ・ポポロ [民衆広場]を一瞥したほかは何も見ませんでした。——私の退屈な昼食会がおかげで一回すみしました。あと二回すまかねばなりません。それでお仕舞！<sup>7)</sup>

ピアノは沈黙したままです。——ご機嫌よう、いとしい、なつかしい友！

「そしてみずみずしい糧、あたらしい血を私は自由な世界から吸い込むのだ。

この私を胸にいだいてくれる自然は、何とうるわしく、やさしいことか！

—— ——— ———

瞳よ、私の瞳よ、なぜ沈むのか？黄金の幻よ、またも姿をみせるのか？

失せよ、幻は！いかに黄金であろうと——

ここにも愛と生命<sup>いのち</sup>があるのだから。」

(リリーと別れてスイスを旅行中のゲーテ。)<sup>8)</sup>

#### 注

1) 『ユニテ』2, p.7 の注 2) 参照。

2) 神聖ローマ帝国皇帝 (在位 1215 ~ 1250) かつシチリア王。主としてパレルモに宮廷をかまえ、波瀾にとんだ政治生活を送る。学芸の保護者、自由思想家としても知られ、ヨーロッパ中世盛期のもっとも異色ある人物のひとり。

3) ムネ・シュリーのこと。当時パリ国立劇場の名優で、若いロランの才能を認めた。『内面の旅路』のマルヴィーダの章(「女友たち」)を参照。

4) エドゥアール・シュレ。不詳。

- 5) 『われら何をなすべきか?』(1884)についてのロランの批判的な手紙にたいする長い返事。
- 6) バスクアーレ・ヴィラルリ。不詳。
- 7) 水曜日にロランがマルヴィーダを訪れるのが習慣になっていた。
- 8) 1775年5月、ゲーテは婚約者のアンナ・エリーザベト・シェーネマン(愛称リリー)に別れを告げ、スイスへ旅立った。6月、チューリヒ湖上で生まれたこの詩(『湖上で』)は、感情と風景の見事な融和によって、若いゲーテの抒情詩の傑作に数えられる。

南大路 振一 訳

## 『ロマン・ロランの母への手紙』に添えて

——— 思い出の師友 ———

住 谷 悦 治

『ロマン・ロランの母への手紙』は『ローマの春』のような往復書簡集でなく、一方的にロランの『母への手紙』であるが、それへの感想を、とくにわたくしが書くのは僭越のような気がする。邦訳者宮本正清さん(わたくしは、新島襄先生が生徒に向って「わたくしを先生と呼ばないで下さい。先きに生れた意味では先生に違いないが、尊敬の意味で先生と言わないで下さい。わたくしはただの平民新島襄ですから」《デビス著「新島襄」明治23年刊》という言葉を思っ、50年の同志社在職中も教授、職員、用務員に平等にさんづけで呼んできました。)がその訳書の「あとがき」に書かれていることを感銘深く繰返して引用するほかはない。この書簡集は1914年から1916年までの第一次世界大戦の勃発から終るころまでの2年

あまりの間の『母への手紙』であるが、「絶えず戦禍におびえているパリの母にこがれて、50歳に達した息子が、孤独感と、意気沮喪の瞬間にはたとえ言葉の綾とはいえ、“私は少女のように泣きたくなります”と訴えることができるのを、すばらしいとも、羨ましいとも私は感じる。……ロマン・ロランの母は地方の中産階級の娘であり、クラムシーという小さな町では、評判のよい公証人の妻であり、ロマン・ロランとマドレーヌの二子のよい母であったが、とくべつに高等教育を受けたこともなく、思想家でもなく、また詩的、芸術的天分が豊かであったとも見えないが、その人間的、母性的純粋さと、深く強い愛情とによって、彼女は、息子が語り、報告するすべての事実や問題を彼女なりに理解し、それについて共感や、憂慮や、憐憫を彼と共にすることができたのである。」と述べておられる。わたくしは邦訳者の宮本さんが書かれたこのあとがき以上に、いったい何を書くことができようかと躊躇して書くことができなかった。編集者の方から電話で原稿のことを催促されて驚いて、何か書かねばいけないと考えたが、けっきょく蛇足になってしまう。書くとすれば蛇足はいくらでもつづくものだと思うようになってほんとうの蛇足を付加させて貰おうと思いきって急ぎ執筆することにした。恥かしいことである。冷汗三斗とはこのことであらう。

わたくしがロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』をはじめて読んだのは大正6年（1917年）で仙台の第二高等学校の生徒のときである。その年の1月25日、「非売品」として発行された《国民文庫刊行会》発行の『ジャン・クリストフ』第一巻、仏国ロマン・ロオラン著、後藤末雄訳、という本で定価も書いてなく、本の奥付には書名も訳者名も書いてない、「非売品」であった。「非売品」という不思議なゴチックの活字に惹かれて購入し読み出してほんとうに驚いた。漱石、鷗外、藤村、樽牛、晩翠、竹風に傾倒しておったところであるがこの長篇ジャン・クリストフもロマン・ロオランも後藤末雄もみなはじめの名であった。そのころ、「白樺」の武者小路実篤がこの訳書を耽読して1週間とか10日間とか、自室に閉じこもり、一歩も出ないで、ハンケチで涙を拭き拭き読んでいるので食事は母が二階の室へ運んでやった、という逸話を伝えきいて、そのことに感激してわたくしはジャン・クリ

ストフという全八巻(原書では10巻)を読む勇気を振り起こした。

わたくしにはロマン・ロランとジャン・クリストフとそのモデルのペートル・ベンとが混乱して雑然と頭の中でこんがらかったまま後々まで十数年が過ぎた。大学を卒業して何年か経て読了しえた因縁ある本であり、いまま書棚にならべてある。ともかくひどく感激した長篇小説であった。その後、第二次世界大戦を終えてから、宮本正清さんのロマン・ロラン、『魅せられたる魂』を岩波文庫で8冊一気に読破した。そのときにはすでに宮本さんのことは知っていた。昭和8年に京大滝川事件のさい、その周辺の一人としてわたくしは悪法「治安維持法」に触れて同志社大学教授を退き、個人的には恒藤恭先生の御厄介になり、先生の『人間はどれだけのことをしてきたか』の下書きをししたり、先生の紹介で菊池寛の「文芸春秋」社の欧州特派員となって渡欧したりしえた。恒藤先生が滝川事件で京大を退かれて大阪商大大学長になられたとき宮本正清さんが大阪商大図書館長に推薦されたことも知った。

その前には英才加古祐二郎君が永眠したとき、恒藤さんが惜しみなげいて加古君のお顔の上に涙をハラハラとおとしたこともわたくしは知っている。とにかく、恒藤一加古一宮本の子弟の友情を知ったのであったという「見えざる手」の不思議な導きの関係なのである。このようなわけでわたくしは心の中では宮本さんの御存じないまま、同門の弟子としての光栄を担っているわけであるが、また、偶然にも戦後、ロマン・ロランを媒介として宮本正清さんはわたくしの唯一無二の恩師となった。ロマン・ロランと呼ぶのでなく、ロマン・ロランと呼ぶのが正しいのですよ、ということまでもわたくしにとっては新しい知識なのであった。

しかしわたくしはまったくロランについて進歩もしていない門外漢である。わたくしは大正11年2月8日同志社就職決定のさい、あの同志社図書館の法学部研究室で、一人の大学生として恒藤先生その他8、9名の教授による首実験にパスしたが、とくに恒藤さんのヨセフ・ディーツゲンの哲学についての質問に答えた。そして下鴨の恒藤さんのお隣りの素人の下宿も世話され、恒藤さんにはご永眠になられるまでご厄介になった。ところが宮本正清さんもやはり恒藤さんとは前のような関係で親しかったことをあとで知った。いわば宮本正清さんとわたくしとは同門の弟子である。ただ学友として、また内心では恒藤さんの同門の弟子として、

またロマン・ロラン研究所の理事という虚名を擁しているだけであるが、ロラン研究所については何が協力できるか見当もつかないでいる。せめて依頼された原稿を書くことだけがわたくしの能力の限界であろう。これも蛇足というていどのものに過ぎない。

ロランに大きな精神的影響を与えた人は周知のように革新的な思想をもっていたためにドイツを追われた老婦人マルヴィーダ・フォン・マイゼンブークであり、ロランはローマで留学中にモノー教授によって紹介された。彼女を知ってから彼女によって激励され、学究青年としての悩みも慰められ努力を継続することができた。もう一人の愛する女性によってロランは不断に自らの魂を磨かれた。その女性が最愛の母アントワネットである。『ロマン・ロランの母への手紙』は最近のわたくしの愛読の書の一つである。若き日のロランは毎日のようにこの母に手紙を書いた。この沢山の手紙をざっと通読するだけでも、母と子の愛情の深さや、お互いに日常生活を報告し合って朝夕一緒に生活しているという心持を有ちつづけなければ承知できないという親愛さ、どんな些細のできごとでも直接自分に感じとり、いたわり合い慰め合う気持を味いつづけて満たされる心の平安さ、それがお互いの魂の切磋琢磨となって磨かれてゆく心のこまやかさが切実に感得できるのである。この『ロマン・ロランの母への手紙』は前述のようにロランから母への手紙のみであるが、この一方的な手紙だけでも470頁の大冊になっているが、一方的になった手紙でも丹念に読めば、当時お互いに同様に殆んど毎日のように手紙の往復がなされていたことが解かる。いかに繁く、いかに多くの手紙が交通機関の往復とともに送られつづけたことであろう。真に驚くに堪えた事実である。この訳書にもあるとおり、当時戦争下で手紙が円滑に運搬されないで時に何日も停頓することもあり、或いは混雑に紛れて紛失することもあったかもしれないが、日付けが遠退いているのは止むをえない当時の戦争状態であったためだろう。その杜絶えたときの日付は数日ブランクになっているが、もし数日のブランクがつづけばその後にはすぐ毎日の日付がついており、朝に書く、夜に書く、翌日また書く、というようにつづけて書いていることがわかるが、底知れぬ純愛にあふれた書簡の頻繁な往復である。わたくしはこ



のしげしげと往復された親子の手紙を読みつつ、自分の学生時代に、どうして母にもっと手紙を書かなかっただろう、わたくしの父母も恐らくわたくしが仙台高等学校や東京の大学に学生生活をしているとき、どんな日常の出来事があるのだろうと遠いふるさとで案じていたに相違ないのだと、いつも昔を思い出して痛く心をさいなまれるのである。わたくしへの父母の手紙はごく僅かしか保存していないが、わたくしが手紙を書くことを怠っておったためであると思う。というのは思い起こせば父母に手紙を書けば、(その多くは月々の学費の催促であったが)必ず父母のいづれかから、多くは母からすぐに返事が届いたのであるが、今にして自分の心の行き届いていなかったことを悔んでいる。自分はそんなにも父母に冷淡だったのだろうか。安心しきって平気でいたのだろうか、反省して父母の死後になって涙を浮かべているわけである。すべては「遅かりし由良之助」で、ただロマン・ロランとその母の前に深く頭を垂れるほかはない。このように繁しげと手紙が往復しつづけられたことは歴史上の驚異の事実であろうし、寡聞なわたくしは他にこのような往復書簡のあった話を聴いたことがない。ロマン・ロランはつぎのような手紙さえ書き送っている。

「いとしい母上

あなたからは3日も4日も手紙がありません。きょうも、きのうも、おとといも。がっかりします。——それから、あすかあさってには、きつと1日に4通の手紙がくるのでしょ」と。

このような手紙を読むとまったく恋人同士の手紙そのままと思われる。恋人同士以上かも知れない。『ローマの春』では、二人の手紙は往復とも編集されているから相互の事情は一読手にとるように読者にもわかるが、この一方的手紙によっても心ある読者には双方の事情は痛いまでに推察することができよう。手紙には必ず差出しの日付が克明に記入されており、手紙としてもとのっているものであるし、どの手紙を読んでみても、その書き出しに必ずロランは、「いとしい母上」と書きはじめてるのであるが、いかにこまやかな心づかいであろうか。

日本人のわれわれの習慣では、「拝啓」とか、「拝復」とかさらにいっさいを省略して「冠省」とか書いて本文を書きはじめるのが通例である。外国の習慣とはい

え、「いとしい母上」と一つ一つ書いて通信する心のあたたかさ、親愛のあふれるまごころが直接に胸に響くのである。こうしたまごころは、知識とか理論とか、もっと数えるなら、社会的地位、名誉、財産、位階、勲等などということを超えて、人間として素朴と純情と真実とのあらわれであり、それは富貴をもってしても動かすことのできぬ、権力をもってしてもこれを奪うことも出来ない永遠最高のこころの発露であり、キリスト教の「聖書」には「心の清き(pureな)ものはさいわいな

り」とか「心の貧しきもの(poor in heart とはまじりけのない純真さを意味するもの)は天国を見ることを得べし」という聖句があるが、ロランの母にたいする親愛の情も母のロランに答える返書も、それが美しい神聖な、清らかな交響楽を奏しているように感ぜられる。

世界的に名の響いているロラン、不朽の名著に世界の読者を感動させているロランは、ガンジー、タゴール、その他、殆んど世界の最高の水準の人びとと肩をならべ、尊敬と共感と愛着をほしいままにしている世紀の優れた思想家、作家として輝いているロマン・ロランとしてでなく、真に母にたいする「おさなご」のごときロランとしての手紙に満ちみちている。この母親の手紙もまた、それは『ローマの春』に数多く採録されているように手も届かない“偉大なロマン・ロラン”に対する手紙というよりも、“わが親愛な息子”としてのロランに書いている手紙であり、ほんとうに傍から見ると、抱きすくめて頬ずりをしているような純情な、「まじりけのない」羨ましい母親の姿とところがまる出しになっている。わたくしはここで母親の手紙について書いているのではなく、ただロランの母への手紙についての感想を書くつもりで執筆したのであるが……。

最後にわたくしは一言宮本正清さんに深く御礼したいのです。それは第一にロマン・ロランについて多くのことを教えられたこと。第二にロマン・ロランの母について教えられ、ロランの母とロランの手紙の往復が如何にその数が多いことか(『ローマの春』)を知ったのみでなく読むことによって母と子、子と母の素晴らしい純愛にわたくしがうちふるえるほど感激していること。第三にまったく思いもかけなかったことであるが、1968年(昭和43年)の9月「ロマン・ロラン展」が、外務

省、文部省、フランス文化省、フランス大使館の後援によって読売新聞社が主催してわが国の文化史上劃期的な有意義の展覧会として心ある文化人、学者、思想家の注目を惹いたが、その時、宮本さんの御尽力は献身的であった。ことにロマン・ロラン夫人が日本を訪れた際、宮本さんは、その展覧会——「愛と平和に生きたロマン・ロラン展」——の立派な写真帖に、わたくしのために、わたくしの姓名をも書き加えてあるマリ・ロマン・ロラン夫人のご署名をもらってくださった。それまで何んといってもわたくしには遠い存在として考えられていたロラン夫人が急に近い親しみを有つ夫人として心に映ったこと。贈られたその写真帖はいま下鴨中川原町「住谷アルヒーフ」にとって記念すべき貴重な文献となっており、目下作製中の「アルヒーフ文献目録」中に光っていることである。思えば与えられるのみ多く、酬いることのすくないわたくしは、長年の学恩を謝するとともに、いま貴ロマン・ロラン研究所設立7周年の記念誌に執筆させていただいたことを機としてかぎりない感謝の意を重ねて表したく思っている。(1978年4月20日)

## Les Amis de Romain Rolland

《ピアニスト ウィルヘルム・ケンプ氏》

宮 本 エイ子

来日は9回目。戦前の1936年に初来日したピアニスト、ケンプ氏。今回も又、日本各地で演奏活動をする。この世界的ドイツのピアニストも又、ロマン・ロランが送ってきた日本のロラン愛好家への客人である。

「私は、ジャン・クリストフを読みました。これこそ、わたしだ……、と信じ

て。はじめてその時、ロマン・ロランに手紙を書きました。60年前のことです。私は20才の青年でした。」

ドイツ語のできないわたし達に向かって、何とかロランとの出会いを解らせようと、強いられたフランス語でケンブ氏は一生けんめい語ってくれた。ケンブ夫人がつけ加えるように、

「夫の父も、わたしの父も、ロランと同年で、1866年の生まれでした。このあいだ、マリ・ロラン未亡人から、一枚の手紙のコピーをもらいました。それは、スウェーデンの有名な枢機卿へロランが宛てた手紙です。『優秀なオルガン奏者がいます。彼の名は、ウィルヘルム・ケンブといます。』ただ、それだけのことですが、マリ・ロラン夫人が、ケンブ氏の名をみつけたとあって、その手紙をコピーして送って来てくれました。その時も、彼女は M<sup>r</sup> Miyamoto に会うようにと書いてきました。」

ドイツのロマン・ロラン友の会会長でもあるケンブ氏が、

「来年1月、ドイツの小さな古い町で、ロマン・ロラン祭をいたします。ドイツでもロラン熱は下火になりました。そこで、私はピアノを弾いて人を集めます。音楽には国境はありません。人を集めるには一番いい手段です。M<sup>r</sup> Miyamoto が日本で出版された一番新しい本、『母への手紙』を、それまでにぜひ送って下さい。それを皆に見せます。日本でもこれだけの活動をしているんだから、という意味で……、皆を鼓舞するために。」

数年前にも、ケンブ氏は、ベズレーに設けられたジャン・クリストフセンターに贈られたピアノイノゴッツレオンの弾き初に出席して、弾いた。ケンブ夫人は笑いながら言う。

「彼は、ガレージでピアノを弾いたんですよ。」

ピアノは草におおわれたガレージの中にひっそりと今も置かれている。昨晚も大阪フェスティバルホールで3,000人の聴衆を魅了した偉大なピアニストが、又、日本の家庭の廊下に置かれたピアノに向かう。

ロラン夫人からつい最近、(1978年5月16日付)手紙がきた。そこには又、ケンブ氏がベズレーへ来てピアノを弾いた、と書いてある。

ロランと共に

杉本 千代子

生きていくことに精一杯であった戦争が終り次第に平和が戻って来るとともに、今まで潜在していた、心の渴望が再び私の心に甦って来た。

何が真実なのか、真理とは何か、私は何の為に生きているのか、と云う疑問に対する答を見出したい、それが私の渴望なのだ。

\* \* \*

人間とは、上昇しようとする高く聖なるものへのあこがれを持ちながら、原罪とか業とか云われる人間的な欲望に依って下降の方へ引っぱられ、その間にあって、苦しんでいるものである、と云われている。

自分を省みるときに正にその通りであって、知性、理性に依って確かな生き方が出来るだろうと考えていたのに、成長して色々な運命的な出来事に遭ったり、自分の周囲の人間関係のむつかしさに惑い、戦争に依って知った人間のはかなさ、残忍さ。自分の理性だけで生きてゆける程、世の中はなまやさしいものではなく、自分は何か確かなものを掴まなくてはならない、と思うようになった。

私が切実に求めていた時、ロランと出会った事は、“運命的な人との出会い”と云う事が出来る、ロラン友の会に入れて頂き、ロランの作品を読む事に依って、私は師を得、友を得た、と同様、私はたえず励まされ、慰めを得るようになった。或る時宮本先生は、ロラン全集の一冊に、“ロランと共に生きる喜びを”と書いて下さった、それこそ私の実感である。

『ジャン・クリストフ』『魅せられたる魂』等の作品を通じて私に語りかけたロランの言葉の救々は、何が真実か、人間は如何に、何の為に生きるかと云う私の問いに確かな答えを与え続け、ロランと共に生きる喜びを得ることになった。

私なりに、私の心に刻まれているロランに就いて拙ない感想を綴ってみたい。

1964年のユニテ復刊第一号に、ロラン友の会の先輩であり哲学者である池田隆正氏の、“ロランの思想の根本”という発表が載せられている。一部を要約引用さ

して頂こう。“ロランの思想の根本は、死＝復活の生存の本質経験に他ならない、つまり宇宙自体——自然たる活ける神——愛に他ならず、生存の本質経験は、かかる生の根本的覚醒である。”

“ロランの作品或は彼の思想のあのみなぎる生は、光を閉ざんとする深い闇を蔵し、闇の底を経ていればこそであろう。生は常に自己に対しての、自己を死地に誘い込む抵抗を得て、それと戦い、生きる時はじめて自己の本来的自覚を得るものである。自己克服の光が生光であろう。”

クリストフ、或はアントネットの生涯の物語の中には、ロランの根本思想が一貫して流れている。つまり、宇宙自体である愛を、人間自体の弱さでもある豊かな感受性に依って苦しみながら、他の人々に分ちつつ、生存の本質体験を成し遂げてゆくのである。それを成し遂げる為に、徹底的に自己の運命、自己自身と死ぬ許りの戦いを経なければならなかった。生存の本質的体験を得て、彼等は本来そこから生れた大自然へ還って行ったのである。

幾度も体験しなければならなかった彼等の苦しみは、人間が時代、人種を問わず、存在している、愛故の苦悩、真実を守るための戦い、生活苦、戦争の悲惨など共通の問題に対するものである。彼等は人間的な弱さを持ちながら、敢然と立ち向かい戦うその強さに圧倒され続けていながら、私はその姿に依って絶えず勇気づけられている。

人間は何の為に生れて来たか、人生の戦いの果てに何があるのかとの問いに、

闘うため、探すためにして見出す為ならず、また譲るためならず

とのロランからの深い示唆は私に、人生の意味に対する答となった。私が置かれた人生を如何に生きるかが、人生の意義であり、結果より重大な事であると教えられた。

私たちの故郷である自然——再び還ってゆく自然——は愛であると云う事をロランは作品を通して語っている。

ゴットフリート叔父さんは自然の愛に満ちた姿を、意味深く味わいのある言葉で語っている。

愛である自然から生れた人間は、自分の人生を生きつつ、その愛を自分にゆかりの

ある人々に与えてゆくために生れたのであろう。

それは決してなまやさしい事ではない、真の愛を悟る迄に、迷いつつ苦しみつつ探し求めなければならず、苦しみや犠牲の上に真の愛がある、と云う事をクリストフやアンネットの生涯を読む事に依って、ロランは私たちに、教え又自分自身の生き方に依って示されている。

ロランの根本思想である自然=愛に依って人間をすべて一つのところに集めることが出来る。愛と真理は人種・国家・風俗習慣を越えるものであり、人間が生存する限り絶えず、生き続けるものである。

ユニテはそのことを意味しているのではないかと思う。私は生きている人以上に私に語りかけるロランの愛に依って、励まされつつ人生の意味を少しづつ学びながら“ロランと共に生きる喜び”を味わいたいと思う。

☆☆☆

## 私にとってのロマン・ロラン

高 島 敏 郎

一年ほど前、基礎物理学研究所のゼミ室で、窓の上に掲げられた額の中にロランの言葉を見付けました。

「もう一度窓を開けよう。広い大気を流れ込ませよう。英雄たちの息吹きを吸おうではないか。」

とフランス語で書かれ、ロランのサインが記されていました。これがロランの自筆であるのか、また誰がいつかけたのかは知りません。しかし、この言葉はやや低迷している近年の物理学（特に日本における）に対して、実に新鮮な響を持って呼びかけているように思われました。

またこれは『ベートーヴェンの生涯』を読んだ時の感動とロマン・ロランとの出会いを思い出させてくれました。大学に入学したばかりの私は、涙をこぼさんばかりに感激して『ベートーヴェンの生涯』を読んだものでした。この本と『キュリー夫

人伝』とは大学生生活の精神的な指針ともなりました。その後『ジャン・クリストフ』から『魅せられたる魂』へと読んでいきましたが、これらから私が学んだものは、自らを変革していく人間に対する信頼、能動的な愛、音楽への情熱などでした。

この様に私の20代前半は、ロランの小説の世界に卒直にはいっていき、そこから「情熱」を得てくることができましたが、最近対象をロランの小説からロラン自身に変えてみようと思っています。当然の事ですが、ロランにも青春時代はありましたし、78歳で永眠するまで、まさに激動する世界史の中で生き、苦悩し、自己を変革していった訳です。晩年の彼の精神は次の言葉によく表わされていると思われれます。

「真の革命的精神は、私の理解するところでは、生活の諸形態が凝固し、またこのような形態のもとで流れが停止することを決して許さない精神です。」

実験物理学の研究者をめざす私にとって革命的精神とは何か？ ロランは何かヒントを与えてはくれるかもしれませんが、

「答えは君自身の体験と苦悩を通して見つけなさい。」

と言うことでしょう。このヒントを『自伝と回想』や『社会評論集』の中に見出そうと思い、読みはじめたこのごろです。(5月7日)

☆ ☆ ☆

## 思い出と現在

成 田 雅 美

アンネットを識ったのは、中学3年の冬。『魅せられたる魂』の題名に惹かれ読み初めたからだ。以来10年。私の読書は一向に進まず、ほとんどロランから遠ざかった時期もあった。でも他の文学者からの感動と違った想いは、「誠実に生きたい」「学びたい」との願いとなり心の奥深く残った。

挫折しても苦しんでも故郷へ帰るように頁をめくり、心寄せせらるうと、思った。

アンネットの雄々しさ、強さは、私に光を与えてくれた。それは、優しげな花の



ようなヒロインに憩うのでもなく、悲しみに共感し自己を慰めるのでもなかった。アンネットの会話、生き方が、まるで細胞の一つ一つを刺激し、「さあ、前進しなさい」と私を力づけてくれるようだった。知識に乏しく人生経験不足の私には、ロランの作品は難しく深く、広大であるが、読者に作品の世界から外に眼を向けさせ、しかも愛をもって導いてくれるのが魅力である。唯私は、最初アンネットの母性愛に憧れた。母親の真の愛情がわかりがたく、心閉ざしがちであった私には、理想的な女性像としてアンネットが慕われたのである。ロジェとの会話の箇所に印つけ繰り返し読んだ。恋愛とか結婚を小説の世界でのみしかわかっていなかった頃、「私もアンネットの年頃になったなら相手とこのように話してみたい」と思った。「どの位」ではなく「どんな風に愛するか」……年月を経、好意を感じずる人に接したおりこの「どんな風に」を自問し、自省の手がかりにした。

傷つき悩む時、いわば逃避口にロランがなってしまったら、友人とロランについて語る機会に恵まれなかっただけに、ロランの真実さは、私にまぶしくなってきた。

最近『魅せられたる魂』第1巻を再読したので、そこに触れながら、述べたいと思う。例えば、誰れかを愛し始めたら少しでもこわすまいとし、熱愛する程、ことに女性は停滞しがちだと思う。相手の意向をくみとり、気に入られ、自分を識ってほしいと努める。アンネットのように、自立心を備えた女性ならともかく、私のように自分に自信なく、人に接する者には、さ細な変化、不都合で、心の中が全部占められ、共に歩むどころか動揺を抑えるにせいっぱいの状態になりがちである。苦しい努力なく、身近の人の笑顔で、「満たされる」ことはできるのだから。

——美しい愛は一生続くかもしれないが、生涯をみたさない——

恋愛に自我を溶け込まず危険におちいつてはならない。……けれど、献身とか犠牲とかの言葉の下でなしに、愛する人のため自分を無にし力になろうとするのも幸いと思える。自分の時間を費やそうとする。夫や子供を通じて外を知り、また影響させる事もできようが、愛する分身が一つ何かを識ったからといって自分が識った事にはならない。活動しつかみ取って行く意欲をそくような相手は伴侶には向かないようだ。アンネットのような女性には特に。ロランは、——性の純潔は絶対の力である——と書いた。ロジェに身を任せたのは、彼女の弱さだろうか？

——彼女はもう愛してなかった。しかもやはり愛していた——

——彼女の精神と心情、精神と感覚とが隔っていた。精神はあまりにもはっきりと物を見ていた。迷いから冷めていた。しかし心情はいっこうそうでなかった。

そして肉体は自分が渴望しているものを失いかかっているのを見ていらいらしていた。

この気持は、近年ようやくわかりかけてきたようだ。将来結婚したならば、もっと、アンネットや関わる人々の心情に理解が深まるかもしれない。ユニテ第5号の「花の種」の御言葉を借りると……アンネットは眺めてもらうための庭の花にとどまらなかった。一年草におわらずに、或は花の種で、種族をふやすよりも、自身の根から、増えようとし、創り育てようとした。自由に……自分がどのように咲けるか、どのように繁殖していけるか見ようとした。中産階級という立派な温室から脱け出、育とうとした。育つには弱い環境に身を置き、処女性という力を捨て、出発して行ったと思える。もち論、生命力の強さもあるが、大花となって開花したと思うより、しっかりと根をはり、絶えることのない植物の源となったように思う。ひととき地上に見える花よりも、地下にひそむ生命の源になろうとしたように思える。そうして次第に自分の“子供達”が芽吹いて行く。……

アンネットは、妻であろうともし、半身を支える理性という夫をも自身の中にひそめているように思う。

——人は、たがいの愛情なしには生きてゆけない——しかもまた独立なしにはやっ  
てゆけない——

これからどのような人生をおくるか、全く、はかりしれない私。男性ならば、自分の生活設計がそのまま家庭を築くのに継続して行けるだろうが、不安定な年齢におり、しかも伴侶の定まっていない女性にとっては、せめて精神の自由を求めざるを得ないようである。私事が加わったが、これからアンネットのような激情に襲われることもあろうし、多くの苦しみを別離を味わうこともあろう。

ロランは教えてくれた、理性の尊さを。

見失なわない強さを。寛大な心を。……

アンネットの生きた、社会を歴史を学ぶにはまだ入口をようやく見つけたばかり。

ロランを読むたび、浅学教養の無さをつくづくと思ひしられる私だが、どんな時にも投げ出さない生きる事への粘り強さを持って光に向って歩んで生きたいと思う。

## 友の会だより

ロマン・ロラン研究所のセミナーを兼ねた友の会例会は、現在までに通算236回をかぞえています。その活動状況は下記のとおりです。

1977年11月26日(土)

233回例会

第58回 ロマン・ロランセミナー

テーマ： 「魅せられたる魂」最終回全体討論

発表者 全員が自己紹介と読後感を語る

出席者 16名

この夜は特に産経新聞記者の取材があり、出席者それぞれのロランとの出会いが真率に語られ、宮本先生からは青年時代に落合太郎先生のお力添えで『魅せられたる魂』の翻訳が岩波から出ることになった経緯など興味深いお話があった。又、波多野先生からは、ロランの作品を各自が自分の生きることとのつながりで読んでいて、文学作品としてのみ読んではいないことを知り、この会へ出席することの必然性を強く感じたということ、それぞれが自分自身であることを貫きながら、人間としての一致点——ユニテ——へとつながっていききたい、と力強いまとめのお言葉をいただき、一同の心にのこる良い会合となった。

1978年1月28日(土)

234 回例会

第59回 ロマン・ロランセミナー

テーマ: 「ユルム街の僧院」

発表者 波多野 茂弥先生

出席者 17名

ロランの学生時代の日記からの抄訳をコピーして出席者に配られ、御自身で解説して下さったので、ロランの若い日の自己形成の過程が大層よく理解でき、歴史上の人物を捉えるロランの眼の確かさの中にあつた愛と共感や、自分の力で何とか形而上学を組み立てようと努力し、自分の得た信仰に常に鼓舞され、知的に裏付けしていこうと励んでいたロランの姿が鮮やかに浮び上って、得るところの多い一夜であつた。

2月25日(土)

235 回例会

第60回 ロマン・ロランセミナー

テーマ: 「ピエールとリュース」

発表者 小田 秀子

出席者 11名

聖金曜日に爆撃に散つた若い二人の愛、発表者の戦時中の体験もあわせて愛のすばらしさを切々と述べられ、純化され昇揚された愛の姿に一同胸を打たれた。

3月25日(土)

236 回例会

第61回 ロマン・ロランセミナー

テーマ: 「クレランボー」

発表者 小杉 妙子

出席者 9名

フランスのインテリたちが、戦争初期のナショナリズムの嵐にどのように捉えられていったか、をこれほどみごとに書いたものは他にない、という波多野先生の解説をうかがい、戦時中の、近くは大学紛争当時の各自の体験から活発な発言があって、この本の内容の重さを改めて思い知らされた。

## あ と が き

两大戦の大きな犠牲によって人類が獲得したはずの平和が、今もなお脅かされつづけている、と感じずにはいられない現在、《政治》を好むと好まないとにかかわらず、私たちは《政治》と無関係では生きられないと思います。編集部の依頼に快く応じて静岡大学の山口三夫先生からお寄せいただきました論文「力に対する精神の闘い」——ロマン・ロランの《政治》原理は、添えられたお手紙にも書かれているように、「ユニテ」ではこれまで余り扱われなかったテーマですが、季節はずれに見えて却ってまさに今日的な重要な問題と思われまふ。この大作を特に「ユニテ」のためにフランス語から書き直してお送り下さった山口先生の御厚意に感謝のほかはありません。別の面からロランを見直すことで私たち各自が自分自身を見つめ、多くの示唆を与えられますことと信じています。

南大路振一先生からは「ユニテ」4号に引きつづいて「ロラン＝マルヴィエーダ往復書簡(4)の1」をいただきました。この4月、京都で開かれたフンボルト留学生の総会に於いてご講演のため、準備に大変お忙しい中で訳出して下さった貴重な書簡です。シチリアでのロランが鮮やかに浮び上がってきます。紙数の都合で後半は次号に割愛させていただきましたので、ご期待下さい。

同志社大学総長を長らく勤められました住谷悦治先生は、青年時代からのロラン愛好家であり、当研究所の理事でもありますが、『ロマン・ロランの母への手紙』の読後感に添えて御自身の回想をお寄せ下さいました。ご高令の先生の昔と変らな純粋なロランへのご傾倒ぶりに胸を打たれます。ありがとうございました。

宮本正清夫人から、ロランの縁に結ばれた知友たちの訪問記をいただくことになり、今回はその第1回としてウィルヘルム・ケンプ氏の章をいただきました。あまりにも高名なこのピアニストのロランとのつながりに驚喜される読者も多いことでしょう。

ユニテの広場の杉本千代子さんは以前からの熱心な友の会会員であり、又セミナーでの発表も積極的にされている主婦です。御自身とロランとの出会いについてまとめて下さいました。高島敏郎さんは京大理学部ラジオアイソトープセンターで研修中の有為の学徒です。最近の研究の方が忙しくてセミナーには余り出席されませんが、御自分とロランについてさわやかな一文を寄せて下さいました。成田雅美さんは北海道でお勤めをされている「ユニテ」の熱心な愛読者で、いつも編集部あてにおたよりを下さる方です。つい先日、編集部の織田さんのお骨折りで京都に来られ、宮本先生との感激の対面を果たされました。若い女性としてこれからの生きる道をロランの導きによって求めたいと模索しておられます。

以上、今号は非常に内容の豊かなものになりましたこと、ひとえに皆さまの御協力のたまものと心から感謝いたしております。これからも「ユニテ」を育てるために奮って御投稿下さいますようお願いいたします。

(編集部 相浦綾子)



ロマン・ロランセミナー

日時 毎月第4土曜日 午後7時～9時  
場所 ロマン・ロラン研究所  
会費 300円  
講師 宮本正清先生・波多野茂弥先生

(参加自由)

主催 ロマン・ロラン研究所

投 稿 歓 迎

- ロマン・ロラン友の会の会員であれば、誰でも自由に投稿できます。現在のところ枚数の制限はしておりませんので、何枚書いて下さっても結構です。ただし、掲載の都合で何回かに分けたり、適当に削ったりすることがありますので、ご承知下さい。
- 原稿は必ず、400字詰、または200字詰の原稿用紙に横書きにして、ロマン・ロラン研究所あてにお送り下さい。
- 締切り日は特にもうけておりません。年2回発行を原則としておりますので、随時、お送り下さい。
- 原稿を掲載した方には、原稿料に代えて、当該「ユニテ」を3部贈呈いたします。

「ユニテ」編集部

ユニテ 第3期 第7号

発行日 1978年3月31日

発行所 財団法人 ロマン・ロラン研究所

京都市左京区銀閣寺前町32

TEL (075) 771-3281

印刷所 昭和堂印刷所

京都市左京区百万遍交差点